

本学学生の体育授業に対する意識に関する一考察(3)

～学科別にみた中・高等学校における体育授業評価について～

白澤貴子 木下茂昭 涌井佐和子

A Consideration for Students' Consciousness of Physical Education in Komazawa Women's Junior College (3) ; Evaluation of Physical Education by Courses at Junior High School and High School

Takako SHIRASAWA; Shigeaki KINOSHITA; Sawako WAKUI

1. 緒言

1991年(平成3年)の臨時教育審議会の勧告により、それまで必須科目であった「保健体育科目」は各大学の実態に応じて位置づけられることとなった。そこで、各大学では、教員間のコンセンサスを得るために相当の時間をかけて話し合いをしたり、あるいは学生の声を聞くために質問紙調査などを実施した。そして、その結果を受けて、従来通り「必須科目」のまま取り扱ったり、カリキュラムを改訂して「選択必須科目」、あるいは「選択科目」として開講するなど、各大学ごとにさまざまな対応をしている。

さて、1997年(平成9年)筆者らは「駒沢女子短期大学学生の保健体育科目に対する意識について」の調査研究の中で、本学学生の体育に対する好嫌度、短大で実施してみたい種目などについて報告した²⁾。その中で、入学する以前に経験してきた体育授業に対する好嫌度については好意的な回答が多く、その割合は各学校期を通しておよそ60%となっていた。また、短大で行ってみたい種目については、エアロビックダンス、テニス、ゴルフなどファッション性と流行を反映した回答が多くみられた。本学の保健体育実技では、1993年(平成5年)よりエアロビックエクササイズ、インドアスポーツ(バドミントン・バスケットボール・バレーボール・インディアカなど)、およびアウトドアスポーツ(テニス・ゴルフ・フライングディスクなど)の3領域の中から学生の興味や関心によって受講種目を選択させており、現段階では学生の運動欲求を充足していると思われる。しかし、さらに種目の多様化や充実を図り、運動の必要性や楽しさ、付加価値などについて指導していくことによって、否定的評価をした学生も体育実技

に対するより積極的な取り組み姿勢がみられるようになるものと思われる。

ところで、本学では専攻学科として保育科、生活科(生活専攻、食物栄養専攻)、英語英文科の3学科で構成されている。それぞれの学科に所属する学生は、その専攻学科の特性上から共通の興味や意識を持っていることが推察される。それは体育授業に対する意識についても同様であり、それぞれの学科ごとに特徴がみられるものと思われる。このことは、授業内容の充実とともに学生の指導にあたって充分考慮しておかなければならないことであろう。

そこで、本研究では、1997年(平成9年)の先行研究に追随して、駒沢女子短期大学学生に保健体育科目に対する意識について質問紙調査することにより、保育科、生活科(生活専攻、食物栄養専攻)、英語英文科の3学科ごとにみた体育に対する好嫌度、運動クラブ加入状況などを明らかにし、今後の授業を充実させていくための基礎資料を収集することを目的とした。

2. 方法

駒沢女子短大に在学する1年生544名(内訳は、保育科112名、生活科217名、英語英文科215名)を対象に、中・高等学校時代に受けた体育授業に関する質問紙調査を実施した。調査は、1997年(平成9年)4月短期大学入学直後の第1回目の体育授業オリエンテーション時に行った。なお、調査用紙の回収率は当日の欠席者を除き100%であった。

調査質問紙は、1997年(平成9年)の先行研究と同様のものを使用した。調査項目は、1)体育に対する好嫌度、2)体育に対する好嫌度の評価理由、

3) 過去の運動クラブ加入状況などであった。体育に対する好嫌度は、中・高等学校時の体育授業それぞれに対する好き嫌いについて、「大変好き=5」~「大変嫌い=1」までの5段階評定尺度を用いた。また、体育に対する好嫌度の評価理由、中・高等学校時の運動クラブ加入状況については自由記述方式とした。

以上の調査データは、各項目に対する単純集計を施した後、特定項目についてクロス集計を行った。さらに、必要に応じて χ^2 検定を施し、有意差も検討した。

3. 結果と考察

3. 1. 学科別にみた中・高等学校時代の体育に対する好嫌度について

学科別にみた中・高等学校時代の体育に対する好嫌度については、図1に示す通りである。全体についてみると、体育授業に対して肯定的に評価した者、すなわち「大変好き」「やや好き」と回答した学生は、中学校で56.9%、高等学校で62.5%であった。一方、否定的に評価した者、すなわち「大変嫌い」「やや嫌い」と回答した学生は、中学校で16.1%、

高等学校で14.7%であった。このように、約60%の学生が中・高等学校時代の体育について好意的に評価している反面、10%以上の者が否定的に評価しているという結果は、先行研究²⁾や宗倉ら⁴⁾の報告と一致していた。また、中学校から高等学校にかけて好意的な評価をする者が増加していた。この傾向は学科別にみた場合も同様であった。

学科別にみると、中学校、高等学校ともに有意な差は認められなかったものの、英語英文科では他の学科より体育に対する評価を「普通」と回答する学生が少なく、すなわち「好き」「嫌い」の評価がどちらかはっきり分かれる傾向を示した。また、保育科は、体育を否定的に評価する学生が他の学科より少ない傾向を示した。この学科では、学生の大半が保育という体を使う仕事を目指していることから、元々体を動かすことを好む学生が多いのであろう。

3. 2. 体育の好嫌度の理由について

中学校、および高等学校における体育の好嫌度の評価理由は、表1に示す通りである。全体についてみると、中学校時代の体育授業に対して好意的に評

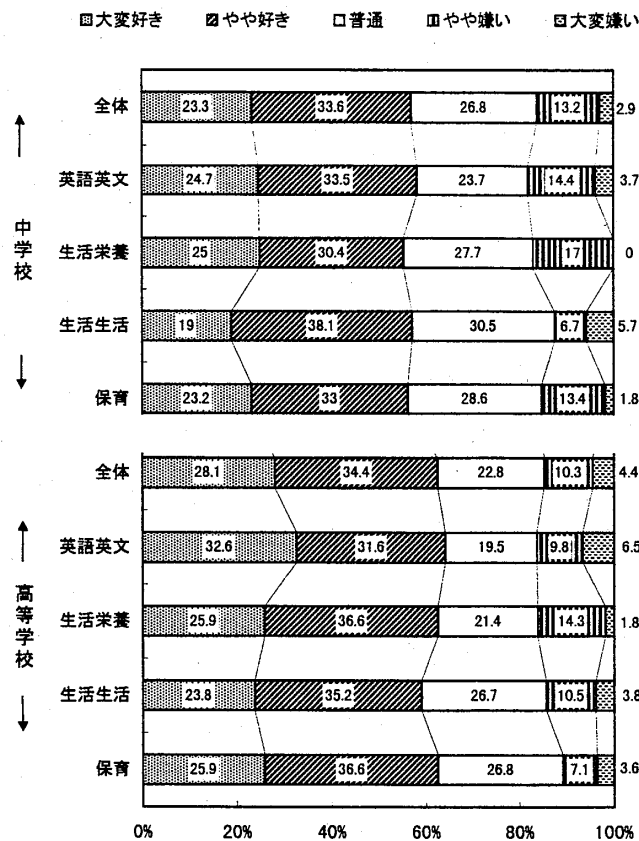


図1 学科別にみた体育に対する好嫌度 (中・高等学校別)

表1 体育に対する好嫌度とその理由(中・高等学校別)

好嫌度	大変好き			やや好き			普通			やや嫌い			大変嫌い		
	順位	N	%	順位	項目	N	%	順位	項目	N	%	順位	項目	N	%
中 学 校	1	47	33.6	1	体を動かすことが好き	38	19.4	1	好きなもの嫌いなもの	37	26.6	1	先生に対する否定感情	12	16.4
	2	29	20.7	2	楽しかった	31	15.8	2	ある	13	9.4	2	運動神経が鈍い	10	13.7
	3	11	7.9	3	好きな種目ができた	25	12.8	3	先生に対する否定感情	11	7.9	3	足が遅い	7	9.6
	4	10	7.1	4	試合が沢山できる	9	4.6	4	足が遅い	10	7.2	4	走ることが苦手	6	8.2
	5	8	5.7	5	先生に対する肯定感情	8	4.1	5	走ることができない	6	4.3	5	嫌いな種目があつた	6	8.2
					その他	85	43.4		自由でできない	62	44.6		その他	26	35.6
					有効回答	140			有効回答	139			有効回答	73	
高 等 学 校	1	38	20.7	1	選択性で好きな種目ができた	52	23.3	1	好きなもの嫌いなもの	18	14.2	1	嫌いな種目があつた	12	19.0
	2	37	20.1	2	楽しかった	35	15.7	2	ある	12	9.4	2	つまらない	6	9.5
	3	30	16.3	3	体を動かすことが好き	22	9.9	3	選択性で好きな種目ができた	12	9.4	3	ついていくのが大変	5	7.9
	4	14	7.6	4	みんなと協力できた	21	9.4	4	先生に対する否定感情	6	4.7	4	できない種目があつた	5	7.9
	5	8	4.3	5	先生に対する肯定感情	8	3.6	5	楽しかった	6	4.7	5	先生に対する否定感情	5	7.9
					自由な雰囲気	57	31.0		自由な雰囲気	79	62.2		足が遅い	2	6.9
					その他	57	31.0		自由な雰囲気	6	4.7		走ることが苦手	2	6.9
					有効回答	184			有効回答	127			その他	12	41.4
					有効回答	223			有効回答	127			有効回答	63	
					有効回答	184			有効回答	127			有効回答	63	

上位5項目以外は「その他」と表記した

価した者の多くは、「体を動かすことが好き」「楽しかった」と回答していた。高等学校の体育授業となると、「選択的で好きな種目があった」を好意的な評価理由としてあげている学生が多かった。また、中学校から高等学校にかけて体育に対する肯定的評価が増える傾向にあると前述したが、その理由として種目の選択性が大きな一因になっていると推察される。種目の選択性については、1993年（平成5年）から新学習指導要領によって導入されるようになりさまざまな意見がある。しかし、たとえ人数、施設、用具、指導者などによって実施できる種目に制限のある中での選択であっても、自主的、意欲的姿勢が体育授業の肯定的評価へつながっていくものと思われる。

一方、否定的な評価理由についてみると、中学校では「先生が嫌い」などの教師に対する否定的感情についての回答が最も多くなっていた。このことから指導者に対する感情も授業への好嫌度に影響することが示唆されよう。高等学校では、「運動神経が鈍い」「体を動かすのが嫌い」「嫌いな種目があった」

表2 学科別にみた運動クラブ加入率（中・高等学校別）

		加入した		加入しない		合計 N
		N	%	N	%	
中学校	全体	371	68.2	173	31.8	544
	英語英文	148	68.8	67	31.2	215
	生活栄養	80	71.4	32	28.6	112
	生活生活	74	70.5	31	29.5	105
	保育	69	61.6	43	38.4	112
高等学校	全体	239	43.9	305	56.1	544
	英語英文	104	48.4	111	51.6	215
	生活栄養	40	35.7	72	64.3	112
	生活生活	46	43.8	59	56.2	105
	保育	49	43.8	63	56.3	112

などの回答が多く、すなわち運動全般や特定の種目に対する苦手意識が体育を嫌いとする理由の上位を占めていた。これらの結果は、先行研究²⁾とほぼ一致していた。

3. 3. 学科別にみた運動クラブへの加入状況について

学科別にみた中学校、高等学校時代の運動クラブへの加入状況については、表2に示す通りである。全体の運動クラブ加入率は、中学校で68.2%、高等学校で43.9%であった。すなわち、中学校から高等学校へと進学するにつれてスポーツへの参加率が有意に減少する傾向を示し、このことは先行研究²⁾や服部ら⁸⁾の報告と一致していた。そして、どの学科においても同様の傾向を示し、学科別の有意な差はみられなかった。

3. 4. 学科別にみた体育の好嫌度と運動クラブへの加入状況について

学科別にみた体育に対する好嫌度と運動クラブへの加入状況との関係を表3に示した。全体についてみると、運動クラブに加入している学生の中で体育授業を「大変好き」「やや好き」と回答した者は、中学校で65.2%、高等学校で76.1%であった。その反面、体育を否定的に評価していながらも運動クラブに加入している学生は約1割存在していた。このように自発的にスポーツ活動をしている学生の中に体育授業に対して否定的評価をする者、すなわち「スポーツ好きの体育嫌い」が存在することが明らかになった。しかし、おおむねは体育授業以外のスポーツ活動に積極的に取り組んでいる者ほど体育授業を好

表3 学科別にみた体育に対する好嫌度別の運動クラブ加入状況（中・高等学校別）

	好嫌度	大変好き		やや好き		普通		やや嫌い		大変嫌い	
		N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
中学校	全体	109	29.4	133	35.8	87	23.5	37	10.0	5	1.3
	英語英文	44	29.7	51	34.5	34	23.0	17	11.5	2	1.4
	生活栄養	24	30.0	27	33.8	19	23.8	10	12.5	0	0.0
	生活生活	18	24.3	32	43.2	19	25.7	2	2.7	3	4.1
	保育	23	33.3	23	33.3	15	21.7	8	11.6	0	0.0
高等学校	全体	94	39.3	88	36.8	34	14.2	18	7.5	5	2.1
	英語英文	43	41.3	38	36.5	10	9.6	9	8.7	4	3.8
	生活栄養	15	37.5	12	30.0	7	17.5	6	15.0	0	0.0
	生活生活	16	34.8	18	39.1	8	17.4	3	6.5	1	2.2
	保育	20	40.8	20	40.8	9	18.4	0	0.0	0	0.0

※好嫌度別の%は、学科別の各学校時代のクラブ加入者に対する好嫌度の割合を示す。

意的に評価する傾向を示し、これらの結果は、先行研究²⁾や波多野⁹⁾の報告と一致していた。また、学科別に違いをみると、全体とほぼ同様の傾向を示した。

3. 5. まとめ

今後の授業を充実させていくための基礎資料を収集することを目的として、学生の体育に対する好嫌度を学科別に調査した結果、以下のことが明らかとなった。

- 1) どの学科もおよそ60%の学生が中学校、および高等学校時代の体育について好意的に評価していたが、その反面、およそ10%の学生が否定的な評価をしていた。学科別にみると、英文科において体育に対する好き嫌いが他の学科よりもはっきり分かれる、保育科において好意的評価する学生が多い、などの傾向はあったが、統計的には有意な差はみられなかった。どの学科も全学科の回答比率とほぼ同じで、好意的な回答は60%前後となっていた。
- 2) 体を動かすこと自体の楽しさや喜びが中・高等学校ともに好意的な評価の主な理由であり、特に高等学校では種目の選択性が大きな要因になっていた。
- 3) 中学校では教師に対する否定的感情が、高等学校では運動に対する苦手意識が否定的な評価理由の上位を占めていた。
- 4) どの学科においても体育授業以外のスポーツ活動に積極的に取り組んでいる学生ほど体育授業を好意的に評価する傾向を示した。

以上のことから、学科別に特出すべき差はみられなかったが、全体の傾向としては、本学学生の体育に対する評価はおおむね好意的であり、運動欲求を持ち合わせていることが推察され、先行研究²⁾とほぼ一致した結果報告が得られた。

4. 結 語

本学学生の中学校、および高等学校で経験してきた体育授業に対する好嫌度について学科別に検討してみたが、学科ごとによる特出すべき差はみられなかったものの、全体の傾向としては先行研究²⁾とほぼ一致した内容となった。すなわち、中・高等学校における体育についてはおよそ60%の学生が肯定

的な評価をしていた。そして、その主な理由として、中・高等学校ともに体を動かすこと自体の楽しさや喜びをあげており、特に高等学校では種目の選択性が大きな要因になっていた。種目の選択性については、たとえ人数、施設、用具、指導者などによって種目に制限のある中での選択であっても、自主的、意欲的姿勢が大切であり、それは体育の肯定的評価に対して大きな役割を果たすことが推察された。先行研究²⁾では、本学での保健体育実技における種目の設定・選択方法については現段階では学生の運動欲求を充足していると報告しているが、さらに種目の多様化や充実を図り、運動の必要性や楽しさ、付加価値などについての検討をすることが必要であろう。また、体育授業以外のスポーツ活動への積極的参加も体育授業評価に関係することから、「スポーツ好きの体育嫌い」を作り出さないためにも、否定的な評価理由についても充分熟知した上で指導することが望まれよう。以上述べてきたことを考慮し、今後の授業を展開することによって、これからの生涯学習・生涯スポーツを実践していく態度の育成にもつながっていくことと考えられる。

参考文献

- 1) 石山恭枝・松本充子・杉本美津江 (1989) 大学生からみた中・高時代の体育授業に関する好き嫌いの一考察。日本体育学会測定評価専門分科会会報誌, 50: 63-67.
- 2) 木下茂昭・白澤貴子・涌井佐和子 (1997) 本学学生の体育授業に対する意識に関する一考察 (1) ~小・中・高等学校における体育授業評価について~。駒沢女子短期大学紀要, 30: 13-20.
- 3) 鈴木秀人 (1996) 運動種目の多様化と選択性授業。学校体育, 49-2: 21-23.
- 4) 宗倉啓・波多野義郎・山田俊二・奥居あかり子 (1978) 大学生が評価する高校体育授業の現状。東京体育学研究, 5: 42-47.
- 5) 新堀通也 (1994) 生涯学習と選択授業。体育科教育, 42-4: 14-17.
- 6) 日本体育学会体育原理専門分科会(編), 大学教育改革と保健体育の未来像。不味堂出版, 1991. P.246.
- 7) 波多野義郎 (1980) 高校生が評価する中学校体育授業の現状。東京学芸大学紀要第5部門, 32:

141-149.

- 8) 服部豊示・波多野義郎・猪狩洋一・秋葉尋子
(1978) 大学生が評価する中学・高校の体育教師. 東京体育学研究, 5: 48-53.
- 9) 波多野義郎・麻生和江・小玉一彦 (1979) 運動能力のことなる大学生が評価する高校体育授業. 東京体育学研究, 6: 13-18.